

入選

テーマ：未来のための今を生きる
「壁のない世界へ」

千葉県・翔凜中学校・高等学校1年 市川菜々香

小学生の頃、私のクラスには発達障がいをもった子がいました。低学年の頃は、その子の障がいは軽度で、周りの子もあまりその子のことを理解していませんでした。しかし、学年が上がるにつれ、その子の障がいは重くなり、授業中叫んだり、学校を脱走してしまうことがありました。同時に周りの子も、その子の障がいがかかるようになってきました。そうすると、あの子に変な人だ。普通の人ではない。そういう偏見をもち始めました。なかにはその子をかろう人もいました。私はかろうことはいけないと分かっている、正直、自分の中に偏見がありました。

ある日、私は特別支援学級の掃除を、障がいをもった子と先生と一緒にしました。障がいをもった子には、私なりに気を遣って接し、優しくしたつもりでした。しかし、突然ある一人の男の子が、隅で「ごめんさい、ごめんさい」と言って掃除をしなくなりました。私はどうすればよいのか分からず、その子に「大丈夫だよ」と優しく声をかけましたが、その子は変わりませんでした。掃除が終わったから、そのことについて先生に聞いたら、先生からこうアドバイスをいただきました。「あの子は、ダメ」という言葉を言われるとやる気をなくしてしまうの。だから、その子のやっていることをダメとかいう言葉で否定するのではなく、こうすると良いよ、という前向きな声をかけるとよい」と。その子が掃除の時に違ったことをして、私が言った「それはダメだよ」という一言にその子は、少しでも、きつみたいな思いをしたと思います。悪いことをしてしまっただけ、と思

ました。
次の日の掃除で、私は昨日の先生のアドバイスを頭に入れて、また一緒に掃除をしました。その子は、最後まで一生懸命掃除をしてくれ

ました。たった一つのこと気をつけるだけでお互いが気持ちよく掃除ができたのです。障がいのある子に対して、偏見をもつ前に、その人のことを、まずは、知ろうとすることが大切だと思いました。障がい者だからと、関わりたくないなどということをしないで、積極的に関わってみましょう。そうして、初めて気づくことはきっとたくさんあるでしょう。関わってみたいことには、障がいのある人を理解することも、知ることでもできません。知ろうとすること、そして知ることが共に生きる社会につながると思います。たとえ障がいをもっていたとしても、同じ人間です。障がいをもっている人との壁がまだ、きつとあります。そこから偏見や差別が生まれてくると思います。同じ社会で暮らす人間として、壁をなくすことで、共に生きる社会は近づいてくると思います。

たとえ、障がいをもっている人でも、私たちにないすばらしいものを持っている。毎年行われる剣道のある試合会場に、障がい者団体が来て、パンやお菓子、飲み物を買っています。私は、小学一年生の頃から、そのパンとココアが大好きでした。とてもおいしくて、ぬくもりを感じる優しい味でした。当時、私は誰が作っているか知らなかったのですが、母から、障がいのある人が作っていると聞いて驚きました。障がいのある人が、こんなにおいしいパンを作れるのかと。しかし、これは、私の偏見をもった考え方だったと思います。障がいのある人がパンを作ったりなんてできないという私の勝手な思い込みがそこにはありました。後に母から聞けば、母は「障がいのある人は、一つひとつやるのがいいから、おいしいパンやお菓子が作れるのよ」と言っていました。そうやって、障がいのある人でも私たち以上のことをやっていることは、きつとほかにもたくさんあると思います。だから、そういうことをしっかり見つけて認めることが大切だと思えます。たとえ、障がいをもっていたとしても、この世界で生きる同じ人間であり、一人ひとりがすばらしいものをもっています。お互いを認め合い、壁のない、皆で共に生きる社会を目指しましょう。